

偏った天候に左右されなくて、栽培した作物を全て収穫することが、私の目標です。



農業に懸ける情熱



1 就農したきっかけ

両親が農業を営んでいたため、自然な流れで就農しました。幼い頃から畑に出て、農作業の手伝いをしていましたが、農業は私にとって遊びの延長線のような感覚であり、楽しみながら手伝っていた記憶があります。

高校を卒業後、すぐに就農しましたが、これまで手伝っていた経験もあり、特に違和感なくスムーズに農業の道に進むことができました。

2 農業者として大変なこと

6年前に父から経営を引き継ぎ、農業経営の責任を担うこととなりました。しかし、これまで経営に関して携わったことがなかったため、すべてを自分で行うことに苦労しています。栽培面では、近年の偏った天候によって予測できない問題が発生することも多く、順調に栽培が進まないこともあります。

経営も栽培もまだまだ未熟な部分が多いため、少しずつ自分なりに考えて取り組んでいきたいと思っています。

3 キャベツの栽培について

近年は異常気象により、従来の方法で栽培しても順調にキャベツが育たない状況が続いています。昨年は特に夏場の偏った天候の影響を受け、出荷時期が集中してしまいました。そのため、価格の乱高下が激しくなり、消費者へ安定価格での供給が難しくなりました。

今後も偏った天候が予想されることから、キャベツ部会では夏場のみ品種を変更するなどの試行錯誤を繰り返して、安定した価格で消費者にキャベツを届けられるよう部会員のみなさんと協力していきたいと考えています。



キャベツの栽培に励む

4 青年部について

地元の先輩の誘いにより19歳で青年部に加え、7年前には青年部長も務めました。

部長時代の1番の思い出は、部員親睦会で開催したミニバレーボール大会で『ケガの無いように全力で楽しませよう！』と自分があいさつをした後に、自分がケガをしてしまったことです(笑)。ケガをした約4カ月後に青年部の名物イベントである情熱直送便が控えていたので、「なんとしても治して走り切らな」と焦る気持ちでいっぱいでした。当日は盟友の声援や支えもあり無事に走りきることができ、改めて支えてくれた盟友の温かさや仲間づくりの大切さを学ぶことができました。



けかを乗り越えて駆け抜けた情熱直送便

人物 memo

岩見沢市幌向町
清水 洋和 さん(38歳)

父の和雄さん、母の和枝さんの家族3人で約30畝の農地に水稻と小麦、大豆、キャベツを栽培。幼い頃から畑に出て農作業を手伝い、高校を卒業後に就農。6年前には経営を引き継ぎました。現在はキャベツ部会の副会長も務め、収量・品質の向上に向けて取り組んでいます。